

フルートとピアノのためのソナタ

F.プーランク

Sonata for Flute and Piano
Francis Poulenc

◆◆ 第2回

講師・有田正広

では今回から実際の演奏についてお話ししましょう。

① 第1楽章冒頭の表記は、前回も触れましたが、第1稿（1994年に改訂された現行の版）では“Allegretto malincolico”、第2稿（1958年に出版されて以来1994年まで使われていた版）は“Allegro malincolico”となっていて、スペルも違います。どちらの楽譜を使うにせよ、演奏では奏者のテンポ感がある程度反映されるわけですが、プーランクとランパルの初演の時点で“Allegretto”を“Allegro”に変更したことは念頭に置いて下さい。

② フルートのパートの冒頭の32分音符のアウトタクト（E-H-G-H）は、

曲が始まる前に大きな、1小節で1つのビートを感じて吹くと良いでしょう。「1と・2と」と数えて「2と」の後で吹いてしまうと、この「E-H-G-H」にアクセントが付いてしまいやすく、はっきりした動きになってしまって、ここで要求される「メランコリー」な表情とは程遠い音楽になってしまいます。「涙」や「雫」がポロリと落ちてくるように吹くと良いと思います。

ここで問題になる“malincolico (malincolico)”ですが、意味は「陰鬱な」「メランコリー」という言葉から来ているのです。「メランコリー」はこ

の曲全体を支配している曲想、情緒、情感ですが、それは具体的にはどういった音符によって作られているのでしょうか。③ まずフルートのパートを見ると、これはクロマティックで出来ています。最初、ホ短調のハーモニーから出でずっと下に半音階で下りてきています。ハーモニックにクロマティックを持ったピアノも、そのフルートのハーモニーに従って行きます。④ そしてピアノのパートにはプーランク自身の言葉で「ずっとペダルを使って」と書いてありますが、これは16分音符を非常にぼんやりとぼかして、はっきりさせずに演奏するよという大変

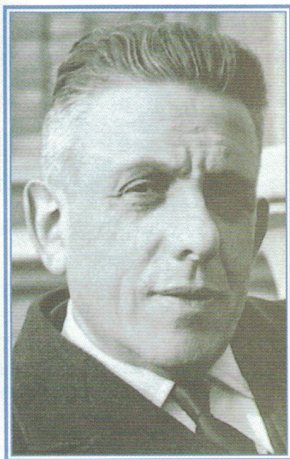
1994年版

1 Allegretto malincolico

FLUTE

PIANO

④ [mettre beaucoup de pédale (les doubles croches très estompées)]



F.プーランク

具体的な指示になっています。クロマティック（半音階）は古来から修辞法上、“Passus duriusculus”（苦難の歩み）というフィギュールとされ、テンポがゆったりとした雰囲気を持ち、レガートで演奏されることが多く、また半音階で下降することから、情感としては“Katabasis”（内向性あるいは「無」を示す。弱さ、下降、否定、過去、悪性、死、絶望 etc.）というフィギュールも持っています。この“Passus duriusculus” プラス“Katabasis” が作り出す情感は正に「メランコリー」そのものなのです。⑤そしてそれを打ち消すかのように4小節目からフルートとピ

アノにハ長調のハーモニーで上昇する急激なスケールが登場しますが、これも上がり切ったと思うとまたすぐに下に沈み込んで行きます。沈んで上ってまた沈んで行くわけですが、全体としてはいつでも沈んで行くように作られています。⑥さらに細かく見ていくと、フルートの2、3小節目、あるいはそれ以降にもよく出てくる弱拍でのクロマティックのトリラーがありますが、これは“Suspiratio”（歌詞の内容を描写したり、驚き、溜息、恐れ、戸惑いなどから導き出される「休止」によって旋律が分断されるもの、あるいは倚音によって作られる不協和音）といわれる

フィギュールで、休符あるいは弱拍の休みを伴ったアップビートで作られるはっきりとしたアクセントを置かず、強拍の後にその跳ね返りで演奏されるような「溜息」を表します。このように、曲の始めの段階で「メランコリー」を表わす様々な表現が出てきますが、これらの表現はこの先でも形を変えながらずっと進んで行くことになります。

練習番号4（34小節）からは打って変わったような元気な表情が出てきます。⑦ピアノのパートには「ペダル無しで」と記されていて、しかも「軽く、そして鋭く（きびきびと）」という指示があります。ここでは結果的にスタッカートのような形になりますが、単純なスタッカートというようには考えないで、軽さを伴ったきびきびとした音型をピアノに託し、それにフルートが乗るようにすると良いでしょう。

1958年版（第16版、1992年）

1. Allegro malinconico

Francis Poulenc
Sonata
for Flute
and Piano
New edition (1994)
Chester Music

1994年版

Francis Poulenc
Sonata
for flute and piano
Chester Music

1958年版（第16版、1992年）

59 *[surtout sans ralentir]*

63

69

96 *céder*



上/ピアノを弾くプーランク
右/プーランクの手



⑧ 練習番号7 (65小節)には、オルガンのコラルのような重厚な響きが出てきます。ピアノのパートを見てみると、2オクターヴのユニゾンでメロディーが作られています。この書法は非常に重厚な、そして横に流れるような、レガートを強調する書き方です。

⑨ そして練習番号8 (73小節)では「ほんの少し速く」という指示があり、これは前のテンポを意識しています。この部分で61小節のアウトタクトからテンポを落として、練習番号7からどんどん遅くしていく演奏法がよく見かけられますが、プーランクが61小節に「殊に遅くせずに」と指示しているので、テンポ感をあまり変えないように、ただし雰囲気が変わるのでその中の若干のテンポの緩みはあるという程度に考えれば良いと思います。ただ、練習番号8からはほんの少し意識してテンポを速くして演奏しましょう。⑩ 練習番号8の頭のフルートのFの音にアクセントが付いていますが、これはスフォルツァンド的なアクセントではなく、リンフォルツァンド的なアクセント、そして付点8分音符と2つの32分音符のリズムをうまく表現するためのアクセントです。ピアノの右手はこのフルートのパートが持っているビート感を補助するような形で4分音符と2分音符で書かれています。⑪ これに対して左手はフルートのパートとは対照的なシンコペーションのリズムを持っています。このシンコペーションのリズムが、この部分の「曲の揺れ」を表わすようになっているので、完全なインテンポで機械的にこのリズムを弾くのではなく、左手は「揺れ」をうまく誘い出すように、そしてその「揺れ」に乗ってフルートは次の拍に寄り添うような付点のリズムを持ったメロディーに仕上がると良いと思います。

この楽章にも、さらに2、3楽章にも、1880年以降のフランス音楽に顕著

に見られる書き方として、フレーズの最後の音価を実際に演奏されるべき長さを正確に記譜するという方法が使われています。⑫ 例えば練習番号12 (99小節) の前のアウトタクトの部分ですが、フルートがトリラーで半終止をし、イ短調でテーマが戻ってくる所——この曲ではほとんど「ロンド」のような形で常にテーマが出てきます——で、フルートとピアノに16分休符が書かれています。この休みを音楽的にきちんと取りましょう。そしてこの16分休符があちこちに出てきますが、この休符を決してないがしろにしないように気をつけましょう。4小節の真ん中、8小節の真ん中、12小節、28小節、32小節等々です。4分音符にタイが付いて16分音符が付き、そして16分休符といった非常に念の入った書き方です。これは響きをうまく処理するという終わり方なので、音価を正確に演奏するというのではなく、フルートとピアノの音を一体としてとらえると良いでしょう。

そしてこのブーランクの音楽の大きな特長として、フランス6人組の理念に則って「町の雑踏・ざわめき」「人々のつぶやき」を表わすかのような、短く途切れるフレーズが組み合わさって大きなフレーズを構成していくという書き方がされています。フレーズの最後の小さな休符を、響きを利用して次の新しい音の開始に結び付け、音楽的な関係をうまく作っていくと、これらの短いフレーズの魅力が出てくると思います。この短いフレーズの例は練習番号14あたりから最後に向かって顕著に現われます。

最後にダイナミックスについて少し触れておきましょう。⑬ 1994年に改訂された現行版では冒頭が *mf*、5小節目が *f*、9小節目を *mf* としています。⑭ 1958年版では冒頭が *p*、5小節目 *f*、9小節目 *fp* (ピアノ・パート) となっています。この *fp* は冒頭部分と変化



Le Groupe des Six et Jean Cocteau.
Dessin de Jean Cocteau.

ジャン・コクトーと6人組
(ジャン・コクトーが描いたデッサン)

をつける意味で、少しその音を強調してまたすぐに *p* に持っていくということだと考えられます。私個人の意見ですが、作曲家は常に自分の作品を新しいアイデアで書き換える可能性があり、これらのどちらかの版に準じるという「二者択一」ではなく、その両方を自分なりに併せて考えれば良いのではないのでしょうか。現在では1958年版は手に入らない状況ですが、もし見ることが出来るならば是非それを参考にしてみると良いと思います。 ■



有田正広 (ありた まさひろ)
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師